

## ジュラシック・トーク

### もう一つの「トゥーランドット」

「トゥーランドット」と言えば、プッチーニの最後のオペラのタイトルとして有名です。そして、その中で歌われるテノールのアリア「誰も寝てはならぬ」は、日本人だったらおそらくほぼ全員が知っている超有名曲ですね。もちろん、それは2006年のトリノオリンピックで金メダルを取ったフィギュアスケートの荒川静香が、この曲をテーマ曲として使っていたからです。

実は、ニューフィルは、2000年11月の第33回定期演奏会でこの曲を演奏していましたが、あいにくブレイク前だったのでニューフィルの団員でもこの曲を知っている人はあまりいませんでした。当時は、すでに1990年にルチアーノ・パヴァロッチが歌ったシングルがイギリスでヒットチャートの1位を飾り、「3大テノール」のレパートリーとして知られてはいたのですが、日本ではまだそれほど認知度はなかったのです。それから二昔ほど経ったころ、ニューフィルはまた同じ「トゥーランドット」というタイトルが付いた曲を演奏することになりました。それは、今度の秋の定期演奏会の中曲、ヒンデミットの「ウェーバーの主題による交響的変容」という、4つの曲から成る作品の2番目の曲です。これもやはりプッチーニのオペラと関係があるのでしょうか。

いや、ここには「ウェーバーの主題による」とありますから、その主題は1786年に生まれ1826年に亡くなったカール・マリア・フォン・ウェーバーの作品からとられていたものなのでしょう。ですから、それがその1世紀後、1924年に作られたプッチーニのオペラから引用されたものではありません。

実は、プッチーニがこのオペラを作った時の台本はオリジナルではなく、古くからペルシャ地方に伝わる民話をもとにして、イタリア人のカルロ・ゴッツィという人が1762年に作った戯曲が原作になっています。ですから、プッチーニ以前にこの戯曲に音楽を付けた人もいたわけで、ウェーバーもその一人でした。彼は1809年に、ドイツの劇作家フリードリヒ・フォン・シラー（ベートーヴェンが「第9」の終楽章の合唱のテキストに用いた詩を書いた人）が「トゥーランドット」をドイツ語に訳した戯曲を上演した時に、その付随音楽を作曲したのです。その時に、テーマとして選んだのが、フランスの哲学者にして作曲家、ジャン＝ジャック・ルソーが1767年に出版した「音楽辞典」の巻末に添付した世界各地の音楽の譜例を集めた図版の中の「中国の歌」というタイトルのメロディでした。これですね。



この付随音楽の楽譜は消失してしまいましたが、後にその序曲が4手連弾に編曲されたものは残っています。その始まりのプリモの楽譜は、こんな感じです。これは、ルソーの楽譜と全く同じものですね。

### Turandot.

OUVERTURE.  
(Componirt 1809.)

Allegro moderato. (Chinesische Melodie.)

8 Picc. Fl.

4 pp

右のQRコードを読み取ると、NMLでちょうどこの部分まで無料で聴くことができます。

(「選択曲を試聴」→「無料体験を開始」→「▶」で試聴が始まります)



そして、ヒンデミットです。その曲ではこのテーマがフルートのソロによって現れます。

### Turandot, Scherzo

Moderato (♩ = 132)

Solo p

A

rit.

atempo

rit. b.

atempo mp

rit.

atempo mp

これも、もちろんルソーが紹介したメロディが使われていますが、そこにちょっとひねりを入れているのが、いかにもヒンデミットらしいところでしょうね。さらに、ウェーバーの「序曲」は、延々とこのテーマが繰り返されるだけですが、ヒンデミットの場合はそれが様々な変奏になっており、オーケストレーションも金管楽器だけ、あるいは木管楽器だけ、さらには打楽器だけで演奏するコーナーを設けるなど、とても手の込んだことをやっています。ですから、こんなのかなテーマだからと思っても、油断は禁物です。